R47a MAGNUM プロジェクト 5．MCG+08-11-011 の可視-近赤外線モニター結果

○富田浩行 (東大 理)、吉井譲、青木勉、峰崎岳夫、塩谷圭吾 (東大天文センター)、
小林行泰 (国立天文台)、菅沼正洋 (東大 理)、B. A. Peterson (ANU)、
土居 守、 本原 顕太郎 (東大天文センター)

MAGNUM プロジェクトにより 2000 年 12 月より近傍活動銀河核 MCG+08-11-011 の多波長モニター観測を行なってきたのでこれまでの結果について報告する。

MCG+08-11-011 は後退速度〜6100 km/s の近傍にあるセイファート 1.5 型の活動銀河核である。この天体は近傍にあるため、見ための等級は明るいが絶対等級は暗く、そのため観測が容易で変動周期も短いと予想し、MAGNUM での最初のモニター天体として観測を行って来た。

観測は MAGNUM 望遠鏡で V バンドと K バンドで行ない、その結果観測された期間での変動は、V バンドで半年で 0.8 等級、K バンドでは同じく半年で 0.6 等級にもおよび、予想通り短い周期で大きな変動を検出する事に成功した。

また、MCG+08-11-011 などの近傍活動銀河核の観測では望遠鏡を振っての相対測光を行っているが、望遠鏡を振る事によって生じる、時間のずれによる大気変動は目的とする測光精度に比べて小さく、大きな問題ではないことも確認した。

この天体は現在も引続きモニター中であり、年会では最新の観測結果も交えて講演を行う予定である。